

平成 26 年度第 4 回うらやす市民大学運営委員会議事要旨

- 日 時 : 平成 26 年 12 月 26 日(金) 午前 10 時 00 分～11 時 40 分
- 場 所 : うらやす市民大学受講室
- 出席者 : 古在委員長、山内副委員長、宮崎委員、辻委員、寺田委員、高谷委員、川島委員、巖委員、笈委員、石田委員
- 事務局 : 小檜山市長公室次長、町山協働推進課長、斎藤係長、井上事務長、高梨主幹、高柳主任主事、仁科主事

■会議次第 :

1. 開会
2. 委員長あいさつ
3. 議 事
 - (1) 平成 27 年度カリキュラム編成報告について
 - (2) その他について
4. 閉 会

■決定事項

- ・平成 27 年度授業科目 (17 科目) の了承を得た。

■議事概要 :

- (1) 平成 27 年度カリキュラム編成報告について

□事務局説明

・「4 平成 27 年度 市民大学開校科目一覧表(案)」について、「うらやす市民大学入門」を引き続き、古在学長・松崎市長にお願いをしたい。

・「歴史を学び、近未来から現代を視る」講座を新たに設けた。これについて、歴史分野が二科目となってしまふという議論があったが、「歴史未来学」が次年度より「気づき」の種別に変更となることから「出会い」の種別に歴史があっても妥当ではないかという結論に至った。

・「歴史未来学」については、次年度は研究・論文発表を行うカリキュラムとなっていることから「気づき」へ種別変更を行った。

・「新しいうらやすブランドのマンションを考える」については、運営企画部と有志の方から今後の市の課題の一つとしてマンションをどうするかがあるのではという意見が上がったため新規科目として設定した。

・「防災」講座については、講師を中林一樹先生へと変更した。中林先生は浦安市の総合防災計画の監修や明治大学の危機管理センターに市の地上訓練も依頼する関係から、市民大学での講師を依頼することとした。

・特別講座については、前回で提示した 4 件の他に、運営企画部からの企画として「浦安のことをもっと知ろう」を企画し、行政各分野の現状と計画について担当者から説明を受け、意見交換を行うものを考えている。

□主な意見(◎委員からの質疑 ○事務局からの説明)

- ◎子育て講座の25名はどの層を対象として集めるのか。
- 子育て中の母親を対象とし、市民活動団体にも声をかけていきたい。特に乳幼児の母親は地域との関わりがまだ薄く、閉鎖的になりがちのため、参加してもらいたいとのねらいをもっている。
- ◎次年度は歴史が二種類あるが、世界史・日本史・浦安の歴史等、何の歴史なのか。またシラバスに○○史と記載した方がわかりやすいのではないか。
- 歴史というよりはマネジメントや人生の送り方などのリーダー講といった内容が強い講座で、歴史としては中国史を中心に考えている
- ◎「うらやす」の表記がひらがなと漢字があるが、何か分け方があるのか。
- 設立準備会にて市民大学の名称を決める際に、ひらがな表記の方がやさしい雰囲気になるのではという意見からひらがな表記となったが、その後カリキュラムを検討するにあたって、表題はひらがな表記でという方向になった。
- ◎市民大学はあくまで協働の担い手を育成する場であって、リタイヤ後に居続ける場所ではない。協働の出口を再確認してカリキュラム編成を見直す時期に来ているのではないか。インキュベーター機能や起業支援といったことも行っていかないと学生が巣立っていかないのではないか。
- ◎カリキュラム検討委員会では、出なかったわけではなく常に出口についての議論を行っている。目指すべき出口を検討し、カリキュラムに反映させて考えている。また、講座ごとに想定される出口を一覧表にして資料にまとめている。
- ◎カリキュラム検討委員会がまとめた出口設計の表について様々な尺度を設けながら評価し、最終的にどのような問題が残っているか洗い出すなど、行政側から再評価することが必要ではないか。特に担いの科目として設定しやすい分野については行政からプロジェクトを具体的に提案する形にすればカリキュラム編成も容易に行くはずである。実際にはそのような形でカリキュラムは作られていないため、担い科目を市民からの『提案型』という形で提起することで、どこかの部署が受けてくれるのではないだろうか。担いの科目を通して提案したことを市民・行政の側からも評価してもらえれば、さらにステップアップすることではないか。このようなすり合わせが上手くいくと担いの科目がもっと社会へ出ていくのではないか。
- ◎現在は財政豊かなため、行政が補完する形の協働であるが、財政が苦しくなると質を維持しながらコストを下げるかという問題になる。そうすると提案型事業委託制度などの制度を導入する必要性が出てくる。質を維持するためにNPO法人や民間に委託することを考えるほかに、新しく起業する市民が出てくる点に注目して、それに対応した講座を今後増やしていくべきではないか。
- ◎カリキュラムは市内において山積みになっている問題をカテゴライズすることによって設定しているため、今の意見も率直な課題の設定として学生からもカリキュラム検討委員会に提示するとより良くなるのではないか。
- ◎出口論・協働事業について市民団体のニーズと行政サービスの理解、双方にギャップがある。これを解決すればいい方向へ向かうという段階にあるのではないか。行政側が出口を一から十まで用意するのは不可能。そのため市民大学で学んだことを協働事業に限らず、市民活動などの市民の思いで進めてもらって問題はない。高齢化や介護の科目ではそういったこと

が実現されているが、街づくり・ブランドなどについては未だ至っていないのではないかと。例えば街づくりに至っては、事業を進めていくだけでなく関係する市民との調整が必要になり、これは市の責務であり、協働で進めていくというわけにはいかない。そういった面も含めて行政側に要望等がくるため単純な問題ではなくなってきた。そのため全ての分野で出口をすぐに確保できるということにはならない。

◎21世紀で一番概念は『care』だという意見がある。市民大学の講座はすべて『care』する『care』学であり、『care』の様々な分野を学べるところがうらやす市民大学だと思っている。『care』する側とされる側が分かれてしまっては成り立たない。『care』されることで『care』する。そういった関係性が市民と行政の間でバランスが取れていないのではないかと。

◎市民・行政相互が理解を深めていかなければいけないという意見がある中で、各講座に対応する市の担当セクションが見えている中でカリキュラムを設定されているのか。市でどういった人が担当しているのかわからない分野になかなか協働として参加しづらいのではないかと。

○担いの科目では特に担当部署を意識してカリキュラムを設定している。講師としてだけでなく、毎講座参加してもらっているものもある。

◎講座の進展具合によっては担当部署が複数にまたがるときもあれば、まったく関係性が見えない回もある。とりわけ『提案型』の授業では、関係していきそうな部署へ案内したり、市民に向けて発表したりすることによって、批判などをしてもらい、次に生かすような講座の進め方も考えている。

◎浦安市の立地を生かして、江戸川区の人生大学に受講生が触れる機会を作ると別の方向性が生まれるのではないかと。反対に市川市には市民大学がないため、うらやす市民大学の活動を紹介することも新たな試みではないかと。

◎なぜ学生会はもう少し企業と結び付かないのかと考えている、学生会や市民大学に寄付する企業が出てきてもおかしくはない。その結果、市に負担をかけずまちづくりの支援ができるというようなことも念頭に置いて市民活動全体のことを考えていっていいのではないかと。

◎来年度のシラバス案では『現』『元』といった行政担当の方がコーディネーターと並んで授業を担当してくれているということは出口・協働につながる理想的な形ではないかと思う。

◎授業の成果は、「市民に向けて」発表や展示会などの機会を設けるようにすると良い。

◎募集要項に「出会い」、「気づき」、「担い」へ学生がどうつなげながら履修していったかを掲載するのも良い。

◎どう「協働」を実践していくか、担当課とコーディネーターが議論していく必要があるのではないかと。

◎市民大学の広報については、学生の皆さんの口コミが大切になってくる。関心を持ってもらうためには、学生の皆さんが色々な場面で地域で活動し、声をかけていただきたい。

◎公民館との垣根はだんだんなくなってきており、生涯学習の中の一つに市民大学があるのではないかと。公民館でも積極的に協働を考える講座も出てきている。

◎多くの方にこういったカリキュラムが準備できていることを知ってもらわないといけないということが大変である。例年、事務局が広報に力を入れているが、それだけで市民に情報が行きわたらないことが心配である。そのため、広報は事務局の仕事だと市民が引いて

しまうと、市民が作った市民のための大学という謳い文句の元、学生会でも広報活動に力を入れていただくとより発展していくのではないかと思います。

- ◎広報部会もホームページなどを駆使して情報発信しようとして検討をしている。また、各種イベントにも広報部会が積極的に参加し、市民大学のチラシを配って広報を図っている。個人的に声をかけた方が、時間を作ってわざわざ市民大学に参加してくれた経験があり、一人ひとりが知ってもらおうという気持ちの発露や姿勢が大切だと思う。
- ◎学生会は受講生の要求を通そうとしてしまうが、本来は学生ではない方の気持ちをいかに汲みとって市民大学で発言するべきではないか。そうでないと新陳代謝が出てこなくなってしまう。
- ◎いかにして市民にうらやす市民大学へ目をむけてもらうかが大事だと常日頃から考えている。声をかけても大半の人が「今更、勉強できない」「時間が合わない」などと言われるため、『大学』という名称にも問題があるのではないか。ひとまず意見として出た広報などの手段を実践してみるのもいいのではないかと思います。
- ◎放送大学の千葉学習センターは最初とても雰囲気が悪かったが、文化祭を実施しようと提案した。踊りでも合唱でもやれることを提示して行ったが、在学生でない多くの方々も参加していただいた。市民大学でもお祭りのようなことをやろうと思えばできるのではないか。
- ◎市民大学のお祭りも一つの手段だが、場所や予算の兼ね合いが難しいのではないか。そうすると行政の考えも必要なのではないか。
- ◎商工会議所や観光協会などの業界団体のほうがはるかにお金を集めやすい。そこでうらやす市民大学の広報をするなどのつながりを持っていかないといけないのではないか。
- ◎反対にうらやす市民大学の目的を絞った方が人が集まりやすいのではないか。PRするのはいいと思うが、カリキュラムの設定などもまちづくりに絞れば、志がはっきりした人が集まるのではないか。人を集めるには公民館講座を多く開催するなどの仕分けを行った方が効果的だと考えている。
- ◎学生になるかならないかは別として市民の理解を得ることが重要なことから、それは目的を絞るだけでは達成できないのではないか。存在を知ってもらわなければいけないし、市民大学に対するイメージを沸かせてもらわなければいけない。
- ◎市民大学から立ち上がった団体が数多くおり、様々なイベントに参加しているが、広報という観点からみれば『市民大学祭』は有効だと思う。祭りだけでなく、学んだこと・学んでいること・市との協働でやっていることを露出することが大切だと考える。
- ◎浦安市の各イベントにブースをもって参加し、祭りのノウハウを得ることから始めてみてはどうか。また、ステージ上でうらやす市民大学の名前を出して広報してみるのはいかがでしょうか。
- ◎『市民大学祭に行った』というのと『お祭りに市民大学のブースがあった』というのではインパクトがかなり違う。また、広報という情報発信にばかり目が行っているようだが、市民が何を考えているか、声をききたいという方向性をもたないと、情報発信するだけでは逃げてしまう。
- ◎公民館講座と市民大学を区別した方がいいという意見であるが、公民館講座を受けている方を市民大学へ引き込めないか。中身は区別するがお互いに協力関係にあればよい。また、市長公室と生涯学習部という管轄の違いで、市長公室は敷居が高いと思っている市民もいるのではないか。
- ◎うらやす市民大学の雰囲気がわかれば入りやすいと思うが、募集が終わった後に、市民大学

の講座を見学するようなことが可能なのか。そこから学生会が見学者の意見を聞くというようにも考えられるのではないか。

○聴講という制度は設けているが、受講生でない一般市民が講座を見学できる制度は設けていない。

◎見学の制度があれば市民の声を聴くきっかけやコミュニケーションをとるきっかけになるのではないかと考えた。

◎大学でオープンキャンパスをやっていないところはどこにもない。模擬授業を設けて見学を受け入れている。案内するのは学生で、教員が案内をすると興味をもってもらえない。

◎学生会の事業部でオープン講座というものを行っている。市民であれば誰でも受けられるようにしているが、中には公民館講座を受けられていて、参加しに来たという方もいる。8割は学生だが2割は一般市民が受けている。その点も考えて、学生会と大学が連携して行っていきたいと思う。

◎公民館講座の目的は学んだことを地域の課題解決に活かしてほしいということであるため、仕組みづくりを上手くすれば、市民大学といい関係性をもって歩んでいけるのではないか。

以上